がんばる決意。

親子丼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
がんばる決意。

【Ｎコード】
Ｎ８５９３Ｋ

【作者名】
親子丼

【あらすじ】
普通の中学生、今木晴美は歩川瞬太に恋をする。付合うことを目的に、がんばる晴美だが・・・？
中学校での、リアルな恋愛を晴美が経験する。

プロローグ

中学校に入学した時、がんばろうと思った。
部活動に入部した時、がんばろうと思った。
テストが始まった時、がんばろうと思った。
一日が始まった時、がんばろうと思った。

色々な時、がんばろうと思った。

しかし、実際はがんばらなくても成り行きでなんとかなった。
『がんばる』とは、気合を入れるだけの言葉だと思っていた。

がんばる・・・一生懸命に努力する
辞書にはこう書いてある。

別に努力なんかしてない。
のほほーんと、過ごしているだけ。
がんばらなくても、不自由なく生きていけた。
今までは・・・。

何度この言葉を使っただろう。
でも、いつも使うだけ。
実行したことはないんじゃないかな。
口から発するだけで、元気になれた気がしたから。
それで十分な言葉だった。
今までは・・・。

お願いです。
私に力をください。

諦めないで、最後まで戦う力を。

お願いです。
私に力をください。
その力をくれたならば、私は決意をします。

お願いです。
私に力をください。
くれなくても、私は決意をします。

・・・。
体中から力が湧き出てきた気がした。
それがただの思い込みだとしても、その力に感謝をする。
私が決意をする後押しをしてくれたから。
この力がなくなる前に、チャンスが過ぎ行く前に・・・。

私は・・・瞬間(いま)、決意をする。
諦めないよ。
辛くても最後までやりきるよ。
納得のいく形になるまで、
私は、私は・・・
がんばるんだから!!

プロローグ（後書き）

実話をもとにしたフィクションです。
ほとんど、作者の「こうなったらいいなぁー」という妄想です（笑）
というか、登場人物が実在するだけであって、話自体はまったくのフィクションです。
初連載ですが、読んでくれた方が少しでも「がんばろう！！」と思えるような作品が完成したら幸いです。
ところどころ、日本語がおかしくて読みにくいところもあると思いますが、感想に改善点などを書いてもらえたらうれしいです。
読んでくれて、ありがとうございましたっ！

第一話　明日は彼氏できるかな

「イケメン君はいるかなー？」
そういって私は、後ろのドアから教室を見回す。
昼休みということで、やんちゃな男子たちが繰り広げるプロレス大会での騒音とも呼べる騒ぎ声、キャーキャー系な女子たちのまさにキャーキャーという甲高いしゃべり声、その他地味な方々による地味な物音。
それらのおかげで「え？」という反応が返ってきそうな、私の発言はみごとかき消された。
だが、それとは別の意味での
「え？」
という疑問系の一言が、隣にいる彩羽（あやは）から発っせられた。
「イケメンな男子はいるかなーって言ったの！」
今度は彩羽にちゃんと聞こえるように言う。
「あの男子は？ほら黒板の前で変な動きしてるロン毛君。」
私の言っていることが分かったらしい彩羽は、言いながら黒板の前にいる髪の長い男子を指差した。
頭の中に描かれている私の好みの顔と、ロン毛君の顔を照らし合わせる。
あー・・・、ムリムリ。
唇太いし、ロン毛という時点で私の好みじゃない。
「論外。」
正直に言う。
「えー！？まじで！？彩羽の好みなんだけど！！？」
ロン毛君を見つめていた彩羽の輝いた目は、私に向き「かっこいいよね！？」と同意を求める目に変わった。
こういうのが好みなんだぁ・・・、と思いながらもう一度
「ウチ的には論外！」

あんなのが好みって、趣味悪いっしょ。
彩羽とロン毛君には悪いけどさ。
「まじかよぉ！？・・・あ！そっか、晴美(はるみ)は歩川(あゆかわ)君みたいのが好みだもんねぇー！！？」
彩羽は、自分の好みの男子を認めてもらえなかったのが悔しいのか、わざと大きめな声で言った。
私は、予想していなかった意中の人物名があがったおかげでとっさに
「ちょっと！！照れるじゃん！！！」
と、彩羽の肩を加減することなく叩いた。
「いったぁい！！」
大げさに肩をおさえて痛がる彩羽の顔には反省の色など無く、悪がきのような笑顔しかない。
幸い昼休みの賑やかさが声の届く範囲を狭くしてるようで、こちらに注目している目はなかった。
プライバシーが漏れていないと分り、彩羽を睨みながらも安堵の息をつく。
・・・では、安心したところで私の攻撃にいくとしましょーか。
彩羽がどんな反応をするか楽しみで笑みがこぼれる。
息をお腹いっぱいに吸い込み
「ロン毛くーん！！？彩羽が好きだってぇー！！」
大きな叫び声と共に教室の中に向かってはきだす。
おかえしだっ！
その瞬間、騒がしかったのがウソのように周りがしーんとなり、多くの視線がこちらに向いてるのが体中で感じられた。
そして、あのロン毛君までもがこっちを向いているではないですかっ！？
・・・あ。声でかすぎた？
調子に乗りすぎたと後悔すると同時に、彩羽が泣きそうな声で
「ちょっ、晴美のばか。うわぁー、ロン毛君こっち来てるし。」
と、再びロン毛君に顔を向ける。

その言葉の通りロン毛君が黒板の前から移動して、私たちのほうに歩み寄ってきていた。
私たちの前に、堂々と居場所を決めたロン毛君は
「ロン毛君って俺のこと？」
と、昼休みの学校とは思えないような周りの静寂を破り、私を見た。
「あ、はい・・・。」
この沈黙の中で声を出すのは緊張して、小さくなってしまった。
ロン毛君は背が高いので、私は上目遣いでロン毛君を見かえす。
「君が彩羽ちゃん？別に付合ってもいいよ。今フリーだし。」
ロン毛君は目線を変えずに言った。
って、目線変えろよ！！
私は彩羽じゃないっ！
「あのっ、彩羽はこっちです。」
大きく目を開き、ロン毛君を見つめている彩羽に顔を向けた。
ロン毛君は今度はちゃんと彩羽に向かって、言った。
「別に付合ってもいいよ。」
さっきと変わらない口調のロン毛君に、「別にって何だよ！！」と思いながらも、表情は変えずに彩羽の返事を待った。
「お、お願いします。」
小さいけどよくとおる声で、お辞儀をしながら彩羽は答えた。
え？カップル成立？

キーンコーンカーンコーン

「良かったね。」と彩羽に言おうとしたらちょうど予鈴が鳴ってしまった。
それと同時に、周りも騒がしくなり私の妙な緊張もなくなった。
「何組？」
「・・・三組です。」
ロン毛君の質問に彩羽が答える。

「じゃあ、放課後三組に行くから。」
「ありがとうございます・・・。」
丁寧に頭を下げる彩羽に
「いや、お辞儀とかいいから。早く教室もどんねーと本鈴なるぞ。」
と、ロン毛君が笑いながら行動をせかした。
「あっ、はい！さよなら。」
そういって彩羽は三組に続く廊下を走り始めた。
私も五組に続く廊下を彩羽のあとから走り始める。
三組の前で彩羽と分かれた。
彩羽の顔は照れながらも幸せそうだった。
私は自分の教室に着くと、何人かの友達とあいさつを交わした後、
廊下側から四列目の一番後ろの席に座った。
五組はいつものように賑やかだけど暖かい雰囲気で、居心地が良かった。

今日は、夏休みが明けて少したった暑い日だ。
私は中学一年生の五組で今木晴美（いまきはるみ）。
これといって特徴はないけど、男子にも女子にそこそこ人気はあると思ってる。
あくまで、そこそこだけど・・・。
今一番ほしいものは、家族以外で私を愛してくれる人。
つまり、彼氏である。
理由は自分でもひどいと思うが、簡単に言うと友達との差をつけたいからだ。
いまどきの中学生は少数だが、彼氏彼女の関係がある。
もてる人は年中恋人がいるが、普通の人は恋人という存在に憧れているだけ。
私は後者だ。
そう、今まで彼氏なんてできたことがない。
だから、よく彩羽と一緒に昼休みを利用して『いい男探し』という

名の、彼氏にできそうな人を他のクラスに探しに行っていたのだ。
今日もそれを行なっていたのだが、本当に目的が達成されるとは思ってもいなかった。
彩羽は小学生からの親友で、中学ではクラスが離れてしまったが仲良くしている。
背は私と同じくらいで中ぐらいだけど、私よりオシャレでそれが似合ってるからうらやましい。
そして、とうとう彼氏ができた。
ああ、うらやましい。
私も憧れられる女の子になりたいなぁ。
とにかく彼氏がほしい。

「ねぇー、聞いて。」
隣の席の歩川に話しかける。
「どーした？」
いつものように答える歩川。
「うちの友達に彼氏ができたんだよー。うちが恋のキューピットなんだ。すごいべ？」
そうだよ、私があの時叫んだから付合うにいたったんだ。
私の前にも、恋のキューピット現れてくれよっ！
「まじで？何したの？」
昼休みのことを歩川に話す。
ちなみに、この歩川は彩羽が言っていた、あの歩川君だ。
たしかに好みの顔ではあるが、私の好みはいっぱいいる。
このクラス一番のやんちゃ坊主の杉原（すぎはら）は、運動部特有の焼けた肌に笑った時の白い歯がよく映えて、思わず見とれてしまうかっこよさだ。
馬鹿だが憎めない登谷（とや）は、眉毛が太くて一見怖いが、瞳は輝いていて目が合うとこれまた思わず見とれてしまう。
他にも魅力的な男子がたくさんいて、その魅力に惹かれる度に恋に

落ちる。
だが、すぐ冷める。
それが彼氏のできない一つの理由だとも思うし、私の悪いところでもある。
いつからか、この気持ちは『一時的なもの』と思い『好きな人』ではなくて『好みの人』という位置付けになった。
そして歩川も『好みの人』という位置なのだ。
もしかしたら、杉原のことが好きなのかもしれない。
もしかしたら、登谷のことが好きなのかもしれない。
もしかしたら、歩川のことが好きなのかもしれない。
私は本当に好きという気持ちが良く分からない。

「それにしても、彩羽がうちより先に彼氏できるとは以外だった。」
「そのうちお前もできるだろ。」
「そうかなぁー？心配。」
「まぁ、できなかったらそれまでの女ってことだ。」
「うわっ！ひどっ！！」
私は、本鈴が鳴り五時間目が始まっていることも気づかないくらいに歩川との話しに夢中だった。

第一話　明日は彼氏できるかな（後書き）

本当に読みにくかったと思いますが、感想お願いします。
第一話は、一部実話で一部フィクションです。
読んでくれてありがとうございましたっ！！

第二話　夏はまだ終わらない

暑さを少しでもなくすために、彩羽と私は日陰を好んで歩いていた。
これからプールに行くとか、アイスを食べに行くとかいう目的ならまだしも、学校へ登校するというために眠い中この炎天下を歩くのは結構つらいものだ。
「あっちぃー。」
彩羽の歩くたびに揺れるポニーテールを、横目で見ながらつぶやいた。
「ほんと暑いね。でさっ、昨日の放課後ゆっちゃんと結局一緒に帰ったんだけど、その時にねー・・・」
一応私のつぶやきに同意はしてくれたものの、幸せそうに彼氏の話を続ける横顔からは暑さなんか感じてないように思えた。

彩羽とは、基本毎日一緒に登校している。
彩羽の家の前で待ち合わせで、そこから約十分かけて学校まで歩いていく。
十分とは長いようで短い。
まぁ、そんな時間も一緒に過ごしたいくらい仲が良いってことだ。
いつもはそんなに話題がないのだが、今日はちがかった。
昨日できた、彩羽の彼氏の話で盛り上がっている。
盛り上がっているといっても楽しそうなのは彩羽だけだが・・・。
人の彼氏の話し聞いて、何が楽しいって言うんだよ！
うらやましいだけだっつーの！！
でも、楽しそうに話す彩羽にはそんなことはいえず、興味があるフリをして聞いた。
ロン毛君の名前は、富士村友（ふじむらゆう）。
彩羽はゆっちゃんと呼んでいる。
彩羽は中学に入学した時からロン毛君・・・いや、ゆっちゃんが気

になっていたらしい。
ゆっちゃんも彩羽のことを『別に付合ってもいい女』に分類していた。
「だから、別にって何だよ！！？」と、思いながらもそんな男と付合っている彩羽に対して、「男運悪いのかな？」と思ったりもしていた。
他にも昨日の帰り道手をつないだとか、色々うらやましい話をしてくれた。
そして、十分という時間は終わり学校についた。
相変わらず暑さはハンパじゃない。

下駄箱で上履きに履き替えるためしゃがんでいると、頭上から声がした。
「よぉ。今日は暑いな。でも、俺のハートは君に出会った瞬間からもっと熱く燃えてるぜ。」
うわっ、何こいつ？
顔を上げてみると、私に向けられた意味深発言ではないとわかった。
「ゆっちゃん！！」
彩羽が驚きと喜びの混ざった声をあげる。
そう、ゆっちゃんから彩羽への愛の言葉だったのだ。
彩羽はゆっちゃんのもとに行くと、さっき以上の笑顔で話し始めた。
あんなのと付き合ってんのかー・・・。
改めて、彩羽の好みは悪いと実感する。
・・・それにしても、私はどうすればいいかな？
ゆっちゃんは私の存在にすら気づいてないようだし、彩羽は私の存在を忘れてるようで「ラブラブしてます」のオーラを出しまくっていた。
友情より恋愛をとるのか彩羽よ！！
独り身の気持ちも知らないで！
だけど、今まで私が見たことのない顔をゆっちゃんに向ける彩羽は

とっても輝いていて、それをずっと見ていると私は急に虚しくなった。
何だろう？
よく分らないけど、すべてがどうでもよくなった。
でも、それはいやな感情ではなく、むしろ体が軽くなったようだった。
自然と私の足は教室に向かった。

「晴美おっはよ！」
教室に入ると、幸音（こうね）がいつものテンションで片手をあげた。
その手に私の片手が合わさり、パシンと軽い音を出す。
いわゆるハイタッチ。
幸音とはクラスで一番仲がいい。
話が合うし、気を使わないで気軽に話せる。
なにより一緒にいて楽しい。
「おはよー。」
私は胸元の体操着をつまみ、中に空気が入るようパタパタしながらいった。
「まじ暑いー。幸音暑くないの？」
今度は制服のスカートを捲り上げパタパタさせながら、いやにニコニコしている幸音に問いかける。
「んー？暑いけどー。」
この反応はさっきの彩羽に似ていた。
ニコニコ笑顔のまま「暑いけどー」の続きを聞いてほしそうにしている。
「なんかあった？もしかして中島（なかじま）との関係に発展が！？？」
中島とは、幸音の好きな人。
「いやー、そんなんじゃないってー。ただね、アイツが「おはよ」って言ってくれたのー。」
テレながら言う。

「まじで！！？良かったじゃん！もう告っちゃえ！」
昨日の彩羽のこともあり、幸音ならＯＫしてもらえるんじゃないかと思った。
まぁ、幸音がテレるところを見たいっていうのもあるけどね。
「それはムリーー！！」
やっぱりテレている。
その時、中島が幸音の横を通った。
私と幸音は中島の後姿を少し追ってから、顔を見合わせた。
幸音はニヤッと顔を崩し、
「きゃぁーーー！！」
と、自分の腕に顔をうずめ、喜びの叫びを控えめに出した。
「やばい！！ちょー幸せっ！！」
幸音は興奮状態。
「朝からテンション高すぎだから！！」
私は笑いながら席に座った。
幸音とは列は違うが一番後ろの席なので一応近い。
だから、席に着いたままでも話ができる。
「真面目なところさー、告らないの？」
気になるところを聞いてみる。
「うーん・・・。分かんない。今のところ予定はないけど、そのうち告るかもねー。」
中島を見つめながら答えた。
「つーか、晴美こそ告白しちゃえよー。」
幸音は私を冷やかすように言った。
「誰にー？」
杉原？登谷？歩川？
「とぼけんなし！！歩川にだよー。」
「は！？別に好きじゃないからね！？気になるだけだって！！」
この前、幸音に歩川が気になると言ったら、好きということになってしまったのだ。

「だから、それは好きってことだよ。」
幸音が真面目半分、からかい半分の顔で言った後、私と幸音以外の人が疑問を投げかけてきた。
「誰が好きなの？」
予想外な人物の介入に、私は
「ちょっ！！ビクッたぁー！！」
と、ビックリした顔になる。
本当にビックリしたんだからね？
かわいこブリッコとかじゃないよ？
その証拠に、私をビックリさせた歩川に
「お前、その顔ヤバイ！！どんだけ驚いたんだよっ！」
って、私の顔を指差しながら言われた。
もし、かわいこブリッコだったら、かわいくなれてない！！
「誰がこんな顔にしてくれたんでしょーねぇ？」
どんな顔だったの気になりながらも、歩川を睨みながら言った。
「ウソだよ。ふつーの顔だった。」
その言葉のほうがウソだと分かる口調と顔で、歩川は席に座った。
「んで、誰が好きなの？」
改めて聞いてくる。
「傷ついたから言わなーい。」
わざとすねて、歩川がいない方を向く。
「ウソだってー。ゴメンー。」
相変わらずふざけたカンジだが、もういいや。
「うちの好きな人はねぇー、・・・お父さん。まぁ、お父さんも好きだけど、いないよ、好きな人。幸音の勘違いなのサー。」
外人っぽく言ってみた。
「へー。」
自分から聞いてきたのに興味なさそう。
外人のところもスルー。
幸音は、私と歩川の様子をニヤニヤしながら見ている。

でも、幸音のことはあえて無視。
「歩川は好きな人いんの？」
さりげなく聞いてみた。
「おれー？・・・いない・・・。」
考えるようにして答えた。
ちょっと怪しかったが、そこは歩川を信じることにする。
「そっかぁ・・・。」
言葉の続きが思い浮かばない。
歩川も話を続けようとせず、ボッーとしていた。
私は、この歩川との間の沈黙が、寂しくて嫌いだった。

第二話　夏はまだ終わらない（後書き）

更新を待っていた人も、そうじゃない人も、今回はどうでしたか？
特別な進展はありませんが、人生そんなもんですよね。
現実的なカンジで、この小説を書いていきたいと思います。
ですが、本当の現実世界でも私は中学生やってるので、人生経験の浅さから微妙なカンジの小説になってしまうかもしれません。
まっ、そんなんでもいい人はこれからもよろしくお願いします。
ありがとうございましたっ！！

第三話　体育祭一週間前

今日も、彩羽と一緒に学校へ登校だ。
私が待ち合わせ場所に遅れて到着する。
彩羽が私の手を握り「アイラブユー」と言ってくる。
私は寝不足のため彩羽の変態な言動に突っ込まない。
いちいち突っ込むと、疲れるからね！
「彩羽はおかしい人なの？」と思うかもしれないけど、これでもいつもどおりだ。
でも、いつもとは違うところが一つあった。
私たちが通う学校は、体操着上下を着た上に制服を着て過ごす。
もちろん登下校も本当ならその格好だが、今日はちがう。
一週間後に体育祭があるため、今日から体育祭の日までは普段の授業がなくなり、一日中体育祭の練習になる。
そのため、体育祭練習の期間中は体操着上下の上に制服ではなく、体操着上下の上に学校指定のジャージで登校＆下校が許されるのだ。
ということで、私と彩羽はジャージ姿で学校までの道を歩いている。

「制服だと暑くて倒れそうになるけど、ジャージならまだましだよねー。」
彩羽が私の手を握ったまま言った。
「うん。最初はこのジャージのデザイン嫌いだったけど、なんか最近気に入ってきたし。」
私は緑に赤のラインが入ったジャージを見ながら彩羽の手を振り払った。
「でも、どうせなら体操着だけで登校でもいいのになぁー。」
彩羽は言いながら再び私の手を握ってきた。
「体操着に名字でっかく書いてあんじゃん。ジャージなかったら、個人情報丸出しだよ？」

私はまた彩羽の手を振り払う。
「そーだねぇ。」
うっ！？今度は抱きついてきた！
「きもい！やめてー！！」
とっさに、彩羽の肩を押した。
彩羽が素直に私を解放するはずもなく、離れようとしない。
私はレズじゃないぞ！！
「暑苦しいー！！」
私の抵抗も虚しく、彩羽から私への変態行為は、途中でゆっちゃんに会うまで続いた。

私は彩羽と別れてから、教室に荷物を置いて幸音と一緒に校庭に向かった。
朝から外で体育祭の練習なのだ。
「はぁ、朝から無駄な体力使っちゃたよ。」
彩羽とのことを思い出しながら言う。
「大丈夫？」
三階から一階へ階段を下りながら、幸音が心配してくれた。
「まぁ、一応。」
「ほんとかよ？あ、そういえば晴美さー、・・・なんだっけ？・・・・なんていうんだっけ？アノ・・・四人一組で足結んで走るやつ！ほら！あるでしょ！？体育祭でうちらがやるやつ！分かる！？・・・・なんだっけアレ？」
幸音は私を心配するのを止めて、必死に『アレ』にあたる言葉を思い出そうとしている。
あー、アレのことかな？
一年生がやるクラス対抗のヤツ。
「学年種目のヤツ？」
「それ！！・・・なんていう競技名だっけ？」
フフ、思い出せないとは老いたもんだ幸音よ。

「えっとねー、・・・・。確か・・・・。」
・・・えっとねぇ・・・なんだっけぇー・・・・。
「知らん！！」
つーか、思い出せない！
「あはは。うちも分からん！とにかくソレの並び順考えてきた？」
並び順？
そういえば昨日の放課後、石岡先生がそんなことを幸音と私に頼んでたような・・・。
「考えてない。」
「まじで？うちは考えてきたよーん。色々なパターンで練習してみて一番タイムがいい並び方で本番もやるって石岡先生言ってたよー。」
やばいぞっ。
私は先生たちには良い子ちゃんで通ってるんだ。
その良い子ちゃんが先生に頼まれた使命を果たせないとは・・・。
「今考えるしかない。」
五組は四十人だから、横四列の縦十列。
男女二人ずつって石岡先生言ってたから・・・。
足の速さと身長さを考えると・・・。
つーか、なんで石岡先生は私と幸音に頼んだんだよー。
あ、それだけ信頼してるってことか・・・。

考えてるうちに校庭で五組が集まっている場所が見つかったため、幸音と私はその集団に並んだ。
朝だというのに、朝の爽やかさより夏の蒸し暑さのほうが勝っていて、まだ運動していないのに汗がにじみ出てくる。
「一時間目は四人五脚の練習をします。」
周りのクラスの騒ぎ声に負けないくらいの石岡先生の大きな声による指示のおかげで、さっき思い出せなかった競技名が分かりスッキリした。

だが、その快感を味わう暇もなく、石岡先生が続けてこう言った。
「今木さんと福本(ふくもと)さんが、並び順を考えてきてくれたので二人の指示にしたがって並んで下さい。」
ううっ。
福本さんしか考えてきていませんよ先生。
「最初、幸音の並び方で頼むー。その間に考えるからっ。」
「おっけー。でもさ、考えるの諦めて先生に謝ったほうが楽じゃない？」
私だって本気で、この時間内に並び方を考えられるとは思っていない。
だって、一列目のメンバーを決めて二列目のメンバーを考え始めると、一列目を誰にしたか忘れちゃうんだもん！
考える時間＝先生からの信用を失うまでの時間、なので、それを先延ばしにしたいだけ。
「いざとなったら背の順にするからいいよ。」
私の投げやりな感じの答えを聞くと、幸音は指示を出し始めた。
「まず一列目から呼んでいくので、呼ばれたら並んでください！一列目は杉原さんと松田(まつだ)さんと岸澤(きしざわ)さんと竹嶋(たけしま)さんです！」
いつものふざけた感じからは想像できない様な、リーダーシップを発揮している幸音に感心すると同時に、杉原と一緒になれなかったことに対して心の中で舌打ちをした。
そんなことより、私は並び方を考えなくては。
うーんと、一列目は・・・最初にリードしたいから足の早い人四人にしよう。
足の早い人は・・・誰だろう・・・。
「四列目は、登谷さんと川城(かわじょう)さんと今木さんと歩川さんです。」
ラッキー☆
男子は私が気になる二人だし、女子のほうもけっこう仲良い優奈(ゆうな)。
私が四列目に並ぼうと立ち上がると
「晴美ぃーーー！！」

優奈が抱きついてきた。
彩羽に抱きつかれると、なんか気持ち悪いけど優奈なら別に平気。
「優奈ぁーーー！！」
私も抱きつき返した。
「やったね晴美！同じ列だよっ！」
心から嬉そうな笑顔で飛び跳ねている。
「でも、この並び方に決定なわけじゃないよ？」
私が考えられたらの話だが・・・。
「大丈夫だよ！タイムが良ければいいんでしょ？優奈たちの列で早く走ればいいって！あっ、早く並ばなきゃ。」
優奈は私の腕を引っ張って四列目に座った。
私の左隣は歩川、右は優奈、優奈の右は登谷、という並び順になった。
でも、優奈は背がちっちゃいし、歩川は背が高いからバランス悪くない？
幸音はどういう基準で決めたのかな。
もしかして、幸音は私のためにこの順番にしてくれたのかも。
じゃあ幸音は・・・。
幸音はどの列なのか疑問に思い、周りを見た。
・・・やっぱり。
幸音の隣は中島だった。
「みんな並んだー？じゃあ紐をわたすから足結んでねー！」
石岡先生がそういって紐を配り始めた。
他の男子や女子達が、足を結ぶことへの照れから文句を言ってる中、
歩川は何も言わずに私と歩川の足をしっかりと結んでいる。
その横顔をみながら私は「この並び方最高！！」と思った。

第三話　体育祭一週間前（後書き）

私は、説明が苦手なもんで読みにくかったと思います。
こんな物語を読んでいただきうれしいです。
ありがとうございましたっ！

第四話　日光浴したみたいに日焼けが痛い

今日の予想最高気温は九月に入っているというのに三十八度。
それを朝のニュースで知ったとき、外で体育祭練習があることが非常にだるく感じた。
でも、四人五脚のメンバーを思い出すと「一年中体育祭練習が良い！」と思った。
結局、昨日私は四人五脚の並び順を考えつかなかった。
石岡先生からの信頼度は下がったものの、幸音が考えた並び順のタイムが良かったこともありメンバーはあれに決まった。
今日も四人五脚の練習がある。
でも、きっと一時間ぐらいしかやらない。
後の五時間ぐらいは応援練習だったり、個人種目の徒競走や障害物競走。
どうせなら一日中四人五脚の練習でもいいんだけどなぁー。
そんなことを思いながら今日も彩羽に抱きつかれていた。
暑さでおかしくなっちゃったのかも・・・。

「彩羽ねぇ、晴美のことゆっちゃんの次に好きなのぉー。」
「それはそれはうれしいですー。」
彩羽は恋人に接する様に、あまぁーい声で引っ付いてくる。
私のことをゆっちゃんと間違えてるんじゃないか、ってぐらい。
やっぱり変だ。
前も変人だったけど、それ以上に・・・。
っていうか、なんかブリッコっぽい・・・。
「実はねー、今週の土曜日ゆっちゃんとデートなんだぁ。」
三日前に付き合い始めてもうデートかー。
早いような気がするけど、そんなもんなのかな。
「いいなー。部活はないの？」

私たちが通う中学校は特に運動部が盛んで、休みなんてないようなものだ。
一番きついといわれている男子バレー部は、大晦日と元旦以外はすべて部活があると言われるほど。
でも、それに比べて文化部はそこまでじゃない。
吹奏楽部や合唱部は実績を残しているだけあり練習は厳しいが、私が所属している演劇部は一年生しかいなく、お遊び部みたいになってしまっている。
それに、学校側は運動部をひいきしているような気もする。
部活動に割り当てられる一年間の活動費用は運動部が多いし、文化祭の練習などで体育館の舞台を使いたい時も運動部が使用しているため一、二回ほどしか本番同様の練習ができない。
それに、文化部だというと先生たちの見る目が変わっている気もする。
気のせいかもしれないが、文化部は文化部で運動部とは違う辛さがあるのだ。

「彩羽もゆっちゃんも部活あるけど、さぼるからだいじょーぶぅ。」
大丈夫ではないと思うが、気にしない方向でいこう。
「どこ行くの？」
「うーん・・・、映画館かなぁー。でも、彩羽つまんないと寝ちゃうからどうしよぉ。」
彩羽は、私の腕をつかんでいる力を強めた。
「映画館で寝ちゃうの！？つーか、いいかげん放せっ。」
彩羽から逃げるように体をそらした。
でも、そんなことで諦めるはずもなく
「晴美のこと好きなんだもぉーん！」
と、さらにベタベタしてきた。
「やめてー！きもいー！」

「やめなぁーい。きもくなぁーい。」
私の拒否反応が逆に、彩羽のいたずら心をくすぐるみたいで彩羽は満面の笑みだった。
そんな中ゆっちゃんを前方に発見。
「ゆっちゃーん！！」
それに気づくと彩羽は私のもとを離れ、満面の笑みでゆっちゃんに抱きついた。
なんだよ！
さっきまで私のこと好きとか言ってたのに、今度はゆっちゃんかよー！
はぁ、ラブラブなんだから・・・。

やっぱり暑い。
体育祭練習期間中に持ってくるのを許されるスポーツ飲料を飲みながら、腕で汗をぬぐった。
一時間目の応援練習が始まったばかりなのに水筒には半分も残っていない。
「次は応援歌をやるよー！」
三年の応援団長が集合をかける。

この学校は各学年九組ずつある。
体育祭では一年と二年と三年の同じクラスがチームになる。
私は五組なので二年五組と三年五組の仲間ということだ。
各チームの団長がひいたくじ引きにより、私たちは黄緑組みになった。

「この大空をっ黄緑色に染めてーあげたーいーよー♪」
という、あの超有名な歌の替え歌を応援団たちは教えてくれた。
「じゃあ、もう一回歌ったら終わりね！」
そう言ったのは、黄緑をベースにしたキャベツのきぐるみを着た先

輩の応援団だ。
可愛いけど暑そー。
「いくよっ！」
そういって応援団達は、私たちが歌う応援歌にあわせて踊り始めた。
総合優勝も応援賞も全部の賞取りたいなー。

「晴美ぃーー！！！」
優奈が水筒を片手にこっちへ走って来た。
「優奈ぁーー！！！」
私は腕を広げて優奈を待ち構える。
「次、四人五脚だってー！！」
勢い良く抱きついてきた。
その反動で私の上半身が後ろにそれ、イナバウアーみたいになる。
それと同時に「ゴキッ」という音が私の体から聞こえた。
「うぎゃぁー！っちょ、背骨死ぬー！」
「あっ、ゴメーン。大丈夫！！？」
私の腕を引っ張って助けてくれたものの、大笑い中。
「大丈夫じゃない・・・。ってか人の不幸を笑うなー！！」
腰をさすりながら優奈をしかる。
でもそれに効果はなく、まだ優奈はお腹を抱えて笑っている。
うー。
こっちは痛いのにー。
私は優奈が持っている水筒をうばってそれを飲んだ。
あ、これ・・・青汁だ。

「いったい。」
「わりっ。」
そういうと歩川は足を結んでいる紐をゆるめてくれた。
「晴美ー。優奈も足いたい！」
「ゴメーン。」

歩川は私と歩川の足を、私は優奈と私の足を、登谷は優奈と登谷の足を結んでいた。
何にもしてないのは優奈だけ。
「だって蝶結びとかできないんだもーん。」が、優奈の言い分。
お前は幼稚園児かっ！？
「よし！」
登谷がいきなり立ち上がった。
私たちは座っていたので優奈、私、歩川とバランスを崩した。
「ちょっと！登谷！いきなり立たないでよ！」
優奈も声を高くして立ちあがる。
それにより私たちはさらにバランスを崩す。
「優奈もたつなー！」
そう言っときながらも私も立った。
「お前もなっ！」
歩川もそれに続いた。
うわ、なんか今の声低くてビックリした。
思わず鳥肌たっちゃったよ。
そう思って歩川の顔を見てみると、いきなり私の顔を見て笑い出した。
「なにー！？」
「お前こそなにそれ！！？」
わけが分からずに優奈のほうを向くと優奈も笑いながら
「口の周りになんかついてるし！・・・あ、分かった！青汁だよ！！」
と笑われた理由を教えてくれた。
青汁～？
健康にいいなと思って飲んでたけど、こんなことになるなんて・・・。
「今木、青汁持ってきたのかよ！？」
登谷の驚いた顔。

「優奈の青汁！」
腕でこするが落ちる気配がない。
「待ってて。ちょっと水道で洗ってくるから！」
私は水道へ向かうため走り出す。
すると後ろから
「あぶねっ！」「きゃ！」「おい馬鹿！」
と三人の声。
それにくわえ、両足首に痛みが。
三人がしりもちをついてるのを見て現状を把握した。
「あ、ごめん！！」
素直に謝る。
「いってー。」「ちょっと晴美ぃ～。」「いきなり走るなよ馬鹿！」
「登谷は馬鹿馬鹿うっさい！」
真顔で睨んだが意味はなく少し黙ってから登谷は笑い出した。
「青汁うける！」
「もぉーーーー！！むかつくーー！」
歩川も優奈も笑いながら起き上がる。
「じゃあ四人五脚で走りながら水道行こうぜ。」
「そうだね。いま列ごとの練習だし！」
歩川の提案に優奈も賛成する。
一人で他の列の人たちが練習してる中を行くのは「ちょっと気まずいかな・・・」ってカンジだし、もちろん
「オッケー！」
ってことで私も賛成！
「左側の足からな。」
いつの間にか登谷も立ち上がっていて足を見ながら三人に言った。
左、左、左、よし！準備完了！
「いっせーのーせっ！でいくぞ？・・・いっせーのーせっ！」
登谷の合図と共に私たちは・・・こけた。
「いってぇーーー！今木！お前右からいったろ！？」

私が原因で・・・こけた。
「あはははは!!ごめーん!こっちが左だと思ったぁー!あはははは!」
「晴美ぃー!優奈膝打ったぁ!!!見て。ほらぁ、赤くなってるー。」
もう笑うしかないよー。
きっと膝が痛いのは気のせいだよー。
登谷がやけに静かなのが怖いよー。
「いい?晴美?こっちが左。お箸持たないほうの手の側が左。」
優奈は左の足を指差して丁寧に教えてくれた。
「こっちが左・・・分かったー。つーかまじでゴメンね。」
登谷の顔色をうかがいながら、謝罪の心を三人にもう一度しめす。
「ああ。別にいいよ。それよりもっかいチャレンジだ!」
歩川は立ちながら前を向く。
「晴美も左がどっちだか分かったんだから忘れないうちにやろ!」
優奈も怒ってないけど、登谷は・・・震えてるしっ!
泣いてんの・・・?
「登谷・・・?早く水道いこ・・・?」
「やっべぇー!!青汁うける!」
「笑ってたのかよ!!?もういいし!歩川早くいっせっーのーせっていって!」
もう左は大丈夫!
「んじゃあ、隣のヤツと離れないように肩組んでー。」
そう言って歩川は腕を私の首にまわしてきた。
ドキッ!
うわぁー、近いよー。
優奈とも肩組んでるけど、歩川のほうが存在感がある・・・っていうか、なんか・・・意識がそっちにいっちゃうかんじ・・・。
歩川はどんな顔してんのかな・・・。
「いっせーのーせっ!」

歩川の声で我に返り、今度は足を間違えないで走り出せた。
順調に四人は走れてた気がするけどそんなことに感動する暇はなく、
まるで意識だけは違う世界にいるようだった。

第四話　日光浴したみたいに日焼けが痛い（後書き）

相変わらず読みにくいですが、どうでしたか？
感想＆評価お願いします！
今回は長かったと思います。
なのに最後まで読んでくれてありがとうございました！

番外編　彩羽の気持ち（前書き）

本編に関係ありませんが読んでいただけるとありがたいです。

番外編　彩羽の気持ち

「遅くなっちゃったぁ。ごめんねぇ。まったぁー？？」
「何分の遅刻だよ！？でも、かわいいから許してやる。」
今日はゆっちゃんとデートの日。
何を着ていくか迷ってたらこんな時間になっちゃったのぉー。
「じゃあ彩羽がかわいくなかったら許さなかった？」
「かわいくなかったら付き合ってねーよ。」
「ほんとぉ？かわいくて良かったぁー。」
「じゃ今日はかわいい彩羽が行きたいとこにつれてってやるよ。」
もおー、かわいいかわいいって照れるよぉ～。
「ん～とねぇ・・・海！」
よく恋愛小説とかで恋人同士が愛を語ってるもんねぇ。
そういうの憧れるんだぁー。
「う、海！？？」
「うん！あ、でもぉ水着は学校用のスク水しかないし泳がなくてもいいよっ。」
浜辺でゆっちゃんの隣にいれるだけでいいの。
「でも海ってけっこう遠いいぞ？」
「ゆっちゃんがいれば何時間でもたえられますっ！」

「わぁーーー！夕日がきれぇーい。」
お昼前に電車に乗って海に着いたのは空が赤くなり始めたころ。
「帰りの金残ってねーかも・・・。」
「だいじょーぶだよぉ。いざとなったら歩いて帰ろぉー。それより見てぇ。海に夕日がうつってチョーきれぇ！！」
「・・・うん。」
反応薄いよぉー。
なんかゆっちゃん元気ない・・・。

疲れたのかなぁ。
「ゆっちゃん座ろぉー。」
ゆっちゃんが動かないから腕を引っ張って砂の上に座る。
「はふぅー。まだ砂あったかいねぇ。」
「・・・うん。」
元気なさすぎぃー！
そういえばちょっと声かすれてたからのど乾いたのかなぁ。
「ちょっと待っててぇー。」
自動販売機は～・・・あった！
ゆっちゃんはコーヒーでぇー、彩羽はぁ・・・アロエの飲むヨーグルト！
彩羽アロエ好きなんだよねぇー。
・・・でもお財布には帰りの分のお金を除いて、一本しか買えない金額・・・。
じゃあアロエの飲むヨーグルトは諦めよぉ。
コーヒーっていっぱい種類があるんだなぁー。
どれにしよっかぁ。
んー・・・これにしよっ。
「ゆっちゃーん！麦芽（ばくが）コーヒー買ってきたよぉ！！」
「ば、麦芽？・・・ありがと。」
ゆっちゃんは黙って飲み始めた。
「おいしい？」
「・・・ラクダのジュースってのがあったらこんな味だと思う。」
意味わかんなぁーい。
「ええ！？？どぉーいうことぉ！？」
「不思議な味ってこと。」
「ふぅーん。不思議な味かぁ。おいしいかまずいかで言ったらどっちー？」
「・・・わかんね。でも、彩羽が買ってきてくれたからまずくはない！」

もぉー、またそんなこと言ってぇー。
でも、ちょっと元気になってくれたし良かったぁ。
ゆっちゃんがテンション←←だと彩羽は寂しいんだよねぇー。
だからこれからも彩羽の隣で元気に笑っててほしいな。
「ゆっちゃん！！」
「何？」
今日ねぇ、
ほのかに香る潮のにおいをかいで思ったんだ。
無限に繰り返される波の音を聞いて思ったんだ。
青い海に赤くうつる太陽を見て思ったんだ。
今日、あなたの隣にいて心から思ったんだ。
彩羽はゆっちゃんのことが
「大好き！！」
だって。

番外編　彩羽の気持ち（後書き）

晴美視点とは違ってセリフ多めにしてみました。
作者＆読者様の息抜きってカンジです！
本編でも早くラブラブシーンを書きたいです・・・。
読んでいただきありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8593k/

がんばる決意。

2010年10月15日01時22分発行